

《梦十夜》之第七夜 PDF转换可能丢失图片或格式，建议阅读原文

https://www.100test.com/kao_ti2020/146/2021_2022__E3_80_8A_E6_A2_A6_E5_8D_81_E5_c105_146230.htm 何でも大きな船にっている。この船が日夜すこしの(たえま)なくい(けぶり)を吐いて浪(なみ)を切ってんで行く。淒(すさま)じい音である。けれどもどこへ行くんだか分らない。ただ波の底から火箸(やけひばし)のような太が出る。それが高い帆柱の真上まで来てしばらく挂(かか)っているかと思うと、いつのにか大きな船を追い越して、先へ行ってしまふ。そうして、しまいには火箸(やけひばし)のようにじゅっといってまた波の底に沈んで行く。そのたんびに(あお)い波がくの向うで、枋(すおう)の色に沸(わ)き返る。すると船は淒(すさま)じい音を立ててその(あと)を追(おっ)かけて行く。けれどもして追つかない。ある自分は、船の男を捕(つら)まえていた。「この船は西へ行くんですか」船の男は怪(けげん)なをして、しばらく自分をていたが、やがて、「なぜ」とい返した。「落ちて行く日を追かけるようだから」船の男はからからと笑った。そうして向うの方へ行ってしまった。「西へ行く日の、果(はて)はか。それは本真(ほんま)か。(ひがし)出る日の、御里(おさと)は西か。それも本真か。身は波の上。。流せ流せ」と(はや)している。舳(へさき)へ行ったら、水夫が大寄って、太い帆(ほづな)を手(たく)っていた。自分は大心くなった。いつ(おか)へ上がれる事か分らない。そうしてどこへ行くのだから知れない。ただい(けぶり)を吐いて波を切って行く事だけはたしかである。その

波はすこぶるいものであった。限(さいげん)もなく(あお)くえる。には紫(むらさき)にもなった。ただ船のく周(まわり)だけはいつでも真白に泡(あわ)を吹いていた。自分は大心かった。こんな船にいるよりいっそ身を投げて死んでしまおうかと思った。合(のりあい)はたくさんいた。たいていは人のようであった。しかしいろいろなをしていた。空がって船がれた、一人の女が(てすり)に倚(よ)りかかって、しきりに泣いていた。眼を拭く手巾(ハンケチ)の色が白くえた。しかし身体(からだ)には更(さらさ)のような洋服を着ていた。この女をたに、悲しいのは自分ばかりではないのだとがついた。ある甲板(かんぱん)の上に出て、一人で星を眺めていたら、一人の人が来て、天文学を知ってるかとねた。自分はつまらないから死のうとさえ思っている。天文学などを知る必要がない。っていた。するとその人が金牛(きんぎゅうきゅう)の(いただき)にある七星(しちせい)のをしてかせた。そうして星も海もみんな神の作ったものだと云った。最後に自分に神を信仰するかとねた。自分は空をてっていた。或サロンに入(はい)ったら派手(はで)な衣裳(いしょう)を着た若い女が向うむきになって、洋琴(ピアノ)を(ひ)いていた。その傍(そば)に背の高い立派な男が立って、唱歌を(うた)っている。その口が大大きくえた。けれども二人は二人以外の事にはまるで着(とんじゃく)していない子であった。船にっている事さえ忘れていたようであった。自分はますますつまらなくなかった。とうとう死ぬ事に心した。それである、あたりに人のいない分、思い切って海の中へびんだ。ところが——自分の足が甲板(かんぱん)

をれて、船とが切れたその刹那(せつな)に、急に命が惜しくなった。心の底からよせばよかったと思った。けれども、もうい。自分は(いや)でもでも海の中へ入らなければならない。ただ大高くできていた船とえて、身体は船をれたけれども、足は容易に水に着かない。しかし捕(つか)まえるものがないから、しだいしだいに水に近づいて来る。いくら足を(ちぢ)めても近づいて来る。水の色はかった。そのうち船は例の通りい(けぶり)を吐いて、通りぎてしまった。自分はどこへ行くんだか判らない船でも、やっぱりっている方がよかったと始めて悟りながら、しかもその悟りを利用する事ができずに、限の後悔と恐怖とを抱(いだ)いてい波の方へ静かに落ちて行った。 100Test 下载频道开通，各类考试题目直接下载。详细请访问 www.100test.com